パートナーシップ キャンパスメンバーズ

学習院大学は博物館と連携しています

学生証をもって博物館にでかけよう！

東京国立博物館
本館7室
画像提供 東京国立博物館

学習院大学では、学内に博物館相当施設である史料館を設置するほか、科学技術や美術・歴史などに対する皆さんの関心を高めることを目的として、学外の博物館と下記の提携を結んでいます。各館の窓口で学生証を提示すると、常設展が無料で観覧でき、一部の特別展・企画展が割引になるなど、さまざまな特典があります。

連携や特典についての詳細は、学内担当部署学芸員課程のHP　http://www.gakushuin.ac.jp/univ/curator/index.html や、各館HPの連携専用ページをご確認ください。

国立科学博物館
地球館3階　パンダ剥製標本
画像提供 国立科学博物館

東京都庭園美術館
外観
画像提供 東京都庭園美術館

【連携名称と対象となる博物館】

- ■東京国立博物館キャンパスメンバーズ：東京国立博物館
- ■東京都歴史文化財団パートナーシップ：江戸東京博物館・現代美術館・写真美術館・庭園美術館・都美術館・江戸東京たてもの園
- ■国立科学博物館大学パートナーシップ：国立科学博物館
- ■国立美術館キャンパスメンバーズ：東京国立近代美術館本館・国立工芸館・国立映画アーカイブ・国立西洋美術館・国立新美術館

※現在、入館に事前予約が必要な場合があります。観覧にあたっては、各館のHPを必ずご確認ください。

国立西洋美術館
外観
画像提供 国立西洋美術館
https://www.nmwa.go.jp/

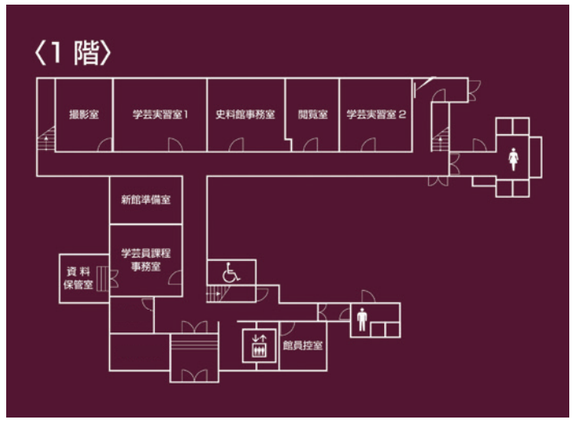
学芸員課程事務室よりお知らせ
—各種証明書の発行について—

学芸員資格に関しては、以下の証明書を発行しています。

○博物館学芸員資格取得証明書〈和文〉〈英文〉
○博物館学芸員資格取得見込証明書〈和文〉〈英文〉
○博物館に関する科目の単位修得証明書〈和文〉

※詳細は学習院大学HP証明書の発行でご確認ください。
https://www.uni.gakushuin.ac.jp/life/issue/

史料館（東別館）館内案内図



学芸員課程事務室の開室について

原則　月曜日～金曜日　9:30～17:30
（11時30分～12時30分は閉室）
土曜日　9:30～12:30

※開室日開室時間は、原則として学習院大学史料館と同じです。最新の開室情報は、学習院大学史料館HP http://www.gakushuin.ac.jp/univ/ua/index.html から開館カレンダーを御確認ください。

※2023年8月1日～2024年3月の期間、新ミュージアムへの移転のため対面での取り扱いを停止しています。ご相談等は、電話またはメールで対応致します。

学芸員

BULLETIN FOR CURATOR' S COURSE No.27

発行日：2023 年 10 月発行
発行者：学習院大学 学芸員課程委員会
〒171-8588 東京都豊島区目白 1-5-1　学習院大学史料館内　学芸員課程事務室
TEL.03(5992)1181　http://www.gakushuin.ac.jp/univ/curator

表紙の写真（右上から時計まわりに）
①錦町華族学校学習院開業式図　②初等科正服 外套
③高松宮宣仁親王所用 初等学科ランドセル　④初等科女子略服
⑤迪宮裕仁親王（昭和天皇）所用学習院正服
※すべて学習院大学史料館蔵

BULLETIN FOR CURATOR'S COURSE

GAKUSHUIN 150th
Since 1877
2027年 学習院は創立150周年を迎えます

学芸員

学習院大学学芸員課程

2023　No.27

学芸員をめざすあなたへ
　未知の作品を見つけるわくわく感 2
学芸員の視点
　展覧会を作る 3
活躍する卒業生
　美術館の現場から
　—新しい「蔵」とともに 6
博物館実習体験記①
　茨城県立歴史館 8
博物館実習体験記②
　東京都現代美術館 9
学芸員資格取得のご案内 10

学芸員をめざすあなたへ

未知の作品を見つけるわくわく感

学習院大学 学芸員課程委員会委員長
文学部教授 史料館研究員
皿井 舞（さらい まい）

今年度より、島尾新先生からバトンを受け取り、学芸員課程委員会委員長を拝命いたしました。昨年度は学芸員課程の授業を担当し、また今年度は委員長という立場から、学芸員課程の授業を受講する皆さんに接してみると、そのモチベーションが実に多様であることを実感いたしました。博物館で働くことを目指す皆さんにはもちろん、博物館や美術館という場が好きだから裏話を聞きたいという皆さんにも、またちょっとした興味から受講してみるという皆さんにも、博物館・美術館が好きになるような充実した授業を開講できるように努めてまいります。

さて、いったい学芸員が普段どのような仕事をしているか、ご存知ですか？学芸員課程の授業を受けていても、なかなかその実態は見えにくいところがあるかと思います。仕事内容は、館の規模によってさまざまですが、非常に多岐にわたります。こういうことは、きっと皆さんもどこかで聞いたことがあるでしょう。ですが、学芸員の使命は共通していると思います。一言で言えば、人々の宝物（たからもの）を守り、未来に伝えることです。その宝物とは、すでによく知られた宝物の場合もあれば、展覧会準備のための調査や普段の様々な調査や活動のなかで見出されたこれまで知られなかったものである場合もあります。

宝物の調査という観点からすると、博物館・美術館の現場で働くためには、学生のころから作品の扱いに慣れることも肝要です。コロナ禍では、大勢で集まって移動して泊りがけで課外学習をする合宿が制限されていましたが、実地で作品に触れることのできないのは美術史学の教育にとって大きな痛手でした。コロナ後の現在、文学部哲学科日本美術史専攻では、浄土真宗高田派の総本山専修寺（三重県津市）と共同で、寺宝調査を実施しています。

国宝の御影堂、如来堂を擁する専修寺には、浄土真宗の開祖親鸞聖人真筆の国宝聖教など国宝・重要文化財が多数所蔵されています。皇室とのゆかりが深かった本寺には、中世から近代にかけての手つかずの良質な絵画・工芸品ほかも数多く残されています。

昨年度3月には、3日間、大学院生と教員とで初めて調査を実施しました。作品に直に触れながら、チーム内でうまく連携して、寸法の測定、銘文の確認などをはじめとした調書の作成、写真撮影など調査の基本のきを学びます。この度の調査では、新発見の絵画作品をはじめ、超絶技巧を駆使した近代の工芸品など多数の宝物が見出されました。どんな作品に出会えるかわからないわくわく感、作品を熟覧してその美術史上の位置づけを慎重に確定していく緊張感は、何物にも代えることができません。

こうした調査の成果として見出された作品の一部は、今年5月、境内に

調査風景（工芸班）

鑑賞実践（絵画班）

リニューアルオープンした新宝物館「燈炬殿（とうこでん）」でお披露目されました。初めての作品解説の執筆も、調査に参加した学生が担いましたが、短い字数で観覧者に作品の魅力を伝えることがいかに難しいことか実感したようです。

展示風景（専修寺燈炬殿）

本学では、令和6年度（2024年）に、史料館が装いを新たにします。学芸員課程のための展示室も設けられることとなり、模擬展示企画を実践することができるようになります。実践の場ができるのは、学習機会の大きな強みになります。新しいミュージアムで、どんな作品や展示に出会えるのか、わたしもとても楽しみにしています。

学芸員の視点

展覧会を作る

学習院大学史料館 EF共同研究員、元そごう美術館学芸員
令和5年度「博物館情報・メディア論」「博物館経営論」担当
森谷（もりや） 美保（みほ）

学芸員の仕事を始めて、30 年以上の年月が経ちました。自分でも驚くことに人生の半分以上、この仕事に携わっていることになります。私が勤めていたそごう美術館は、デパートの中にある美術館なので、年間の展覧会数はデパートへ来店するお客様の来店頻度を想定し、1990 年代には年約 15 本、数を減らした 2000 年以降でも年 10 本程度の展覧会を開催しています。他の美術館・博物館での年間展覧会数が 3 ～ 5 本程度なのと比べると、その数がとびぬけて多いことに気づかれるでしょう。とはいえ学芸員の数は決して多くはなく、各学芸員は年 3 ～ 4 本程度の展覧会を担当することになります。毎月の展示替と、さまざまな展覧会を絶え間なく経験したことは、現在の私の糧になりました。美術館に勤続した 22 年間で 60 本以上の展覧会を担当し、その後フリーランスの学芸員となってからも 9 本の展覧会を手掛けており、最近では「展覧会屋」を自認しています。

学芸員による「企画展」、新聞社・企画会社が作る「巡回展」

一口に展覧会といっても、現在国内で開催されている展覧会にはさまざまな作り方があります。大きく分けると、「企画展」と「巡回展」です。

「企画展」は美術館・博物館に所属する学芸員が必要な業務をすべて行って、作りあげる展覧会です。企画の発案に始まり、展覧会構成の構築と出品リストの作成、出品交渉から借用・展示・返却までの作業、ポスター・チラシの制作や広報活動、図録の制作、さらにすべての作業の必要経費を想定した収支予算書の作成など、膨大な仕事があり、開催までには 2 ～ 3 年程度を要します。

近年は単独館開催での「自主企画展」だけでなく、複数館の学芸員が共同で作り上げて、各地で開催する「共同企画展」が主流といえます。「共同企画展」の場合、必要な仕事と経費を開催館で分担することができ、多くの学芸員が参加することで、展覧会の内容も充実します。また「共同企画展」では新聞社や、展覧会の企画、制作を手掛ける企画会社が作業に参加する場合があります。新聞社や企画会社は、各開催館が負担する経費を取りまとめて、支払いの代行や事務手続き、展覧会図録やオリジナルグッズの作成に携わるなど、展覧会の事務局的な役割を担います。

一方「巡回展」とは、新聞社や企画会社が展覧会を作って、それを全国の美術館・博物館が購入し、開催する展覧会を指します。近年多いマンガやアニメ、キャラクターなどの展覧会の多くは、新聞社などが制作した「巡回展」です。こうした展覧会では、煩雑な権利問題などをクリアーにする必要がありますが、新聞社はそれらを含め、展覧会の構成作りや作品借用などを、関係者と協議しながらまとめ、一つの展覧会として作り上げていきます。知名度や人気の高いこれらの展覧会は、固定ファンにより集客が期待できるため、美術館・博物館にとってはありがたい展覧会です。このほかに、全国の著名美術館・博物館、神社仏閣などのコレクションによる「○○コレクション展」「○○寺展」なども、新聞社や企画会社が「巡回展」として構築する場合がよくあります。

「巡回展」を購入した美術館・博物館は、新聞社・企画会社に展覧会の構築や輸送を任せて、館で待っていれば展覧会が運ばれてくるというシステムですが、開催館の学芸員は何もしないわけではありません。「巡回展」図録に開催館の学芸員が作品解説などを執筆する場合もありますし、チラシ裏面の案内文やプレスリリースの作成、ギャラリートークなども行わなければなりません。担当学芸員はその分野の専門外であっても、「巡回展」の担当者になれば、展覧会の内容を勉強する必要があるのです。

さらに新聞社やテレビ局は、海外の有名美術館や国内の神社仏閣などから名品を借用し「○○美術館展」、「○○寺展」などを制作して、東京国立博物館平成館、東京都美術館、国立新美術館などと共同開催する大規模展覧会も構築しています。これらの展覧会では開催館の学芸員、研究員は学術協力として、作品の出品交渉や借用時の立会い、展覧会図録や会場内のパネル、キャプションの制作など、新聞社などと協力しながら展覧会を作り上げていきます。このように、国内ではさまざまな手法で展覧会が構築されているのです。

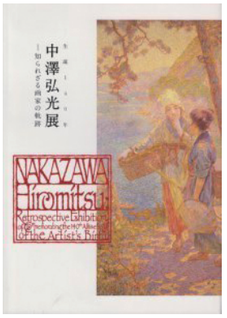
「企画展」の発案から構築まで

では、美術館・博物館の学芸員による「企画展」の作り方を簡単に紹介しましょう。

まず「企画展」の発案から開催までには、平均すると 3 年程度、長い場合は 5 年以上、短くても 1 年程度の期間が必要となります。「企画展」は学芸

員が発案すれば、どんな内容でも開催できるというわけではなく、所属館の承認を得るために「学芸会議」などに諮り、その後正式に館から開催の了承を得て、準備が始まります。

「企画展」の開催時期も、開催の可否を検討する上で重要なポイントとなるでしょう。たとえば、個人作家の「企画展」の場合、作家の生誕、没年といった記念の年に開催することが多く、学芸員はこれらを念頭に開催するタイミングを考えます。これまで私も「生誕 140 年中澤弘光展」(2014 年、そごう美術館・三重県立美術館による共同企画展)や「生誕 110 年黒田辰秋展」(2014 年、そごう美術館・北海道立旭川美術館による共同企画展)など、記念年での開催を理由に、実現に至りました。



「生誕140年　中澤弘光展」図録、2014年

また、国内でオリンピックが開催されるなど特別なイベントがある年も、それに関連した展覧会を開催するチャンスです。日韓ワールドカップカップの年の「日本民藝館所蔵　李朝の工芸展」(2002 年、そごう美術館自主企画展)、横浜開港 150 年を記念した「文明開化を描いた版画家　川上澄生」(2009 年、そごう美術館自主企画展)は、このタイミングだからこそ、実現できた展覧会といえるでしょう。

企画の検討段階で開催理由とともに求められるのは、展覧会に必要な経費概算書の作成です。開催理由があったとしても、経費があまりにも莫大に必要

そごう美術館
「日本民藝館所蔵　李朝の工芸」2002年

となり、館の予算を大幅に超えるなら、開催は不可能となります。学芸員は「企画展」発案と同時に、作品借用先を想定した輸送費、作品内容に応じた造作費の有無など、必要経費の概算を検討しなければなりません。

さらに企画展を開催した際の入館者数や、図録や物販の売れ行きなども予測する必要があり、これらも「企画展」開催可否の判断基準のひとつになります。入館者数とともに、図録販売数の予測もたてて、制作する図録の部数なども検討します。これらの数字は、過去の展覧会実績により予測が可能です。このように、「企画展」を発案した学芸員は、企画内容だけでなく、金銭管理も行わなければならないのです。

「企画展」開催が確定したのちは、いよいよ展覧会の出品作の選定に入ります。最初はドリームリストなどといって、展覧会構成も自由に考案し、出品したい作品を選定していきます。ところがいざ出品交渉を始めると、所蔵者の都合で出品できない場合や、輸送費が高額で出品をあきらめざるを得ないこともあります。こうした作業を経て、最終リストが完成し、出品作を考慮した章構成が完成するのです。そして開催の約 1 年前には、出品依頼書などの書類の作成、輸送費の最終見積もり、輸送・展示時の作品保険や著作権の手続き、図録制作会社の選定や制作部数などの見積もり、パネル・キャプションや造作内容の精査、選定といった仕事が始まります。

企画展開催の 3 か月前くらいから、作業は佳境（地獄！）を迎えます。展覧会図録の原稿執筆、借用のための書類やスケジュール作成、パネルやキャプションの原稿執筆と制作、会場図面の作成や造作の発注などなど。作品の借用時には、輸送会社が用意した美術品専用車に作品を乗せ、学芸員はその車に添乗して借用先を巡ります。これらの作業は他の学芸員も補助してくれますが、「企画展」の担当学芸員は全業務と進捗状況を把握して、不測の事態が起きたら、その都度さまざまなことを判断しなければなりません。

こんな作業をしたのちに、いよいよ展示となります。借用した作品の開梱時には、作品点検を行い、事前に作成した図面通りに作品を配置し、気になるところは適宜入れ替え、作品の固定や地震対策などを指示して、パネルやキャプションの位置を決め、展示が完成します。作品が美しく展示された展示室を見るのは、それまでの苦労が報われる瞬間です。そして自主企画展（単館開催の場合）の初日を無事に迎えると、喜びもつかの間、ただちに作品返却の段取りに入ることになります…。

書いていても頭痛がするくらい大変な仕事ですが、一度「企画展」を手掛けると、恐ろしいことに学芸員の仕事は俄然楽しくなってきます。「企画展」という底なし沼にはまった学芸員は全国に無数にいるのです。

「民藝　―美は暮らしのなかにある」の場合

そごう美術館を退職して以降、現在私は特定の館に所属するのではなく、フリーランスの学芸員として仕事を続けています。フリーランスの学芸員って？と思われるかもしれません。私の場合、そごう時代に一緒に仕事をした学芸員の友人や大学の先生方、新聞社や企画会社の方たちからお声がけいただき、学芸員時代の経験を活かした「企画展」の構築に携わっています。

今夏開催した「民藝　―美は暮らしのなかにある」（以下「民藝展」）を例に、その実態を紹介しましょう。「民藝展」は 2017 年秋、映画会社「東映」で展覧会事業を手掛ける方から連絡を受け、スタートした仕事です。「民藝」をテーマにした展覧会を開催したいので、構成やリストの作成など監修をお願いしたいといわれました。「民藝」は私の研究テーマのひとつでしたので、快諾したのち、本格的に仕事が始まりました。

ところで、この話を得た 2017 年時点では、開催美術館は全く決まっておらず、開催の時期もあいまいなままでした。2018 年以降、展覧会の大まかな内容が確定したのち、東映は本展を全国の美術館・博物館へ「巡回展」として販売する予定でいました。私は民藝の趣旨に沿った構成案と出品リストを提示し、東映の担当者と協議を重ね、何度も企画構成案とリストを練り直しました。

その後 2020 年には、共催者として朝日新聞社が加わることになり、東映・朝日新聞社が協力し「民藝展」開催に向けた、全国の美術館・博物館への営業活動を積極的に展開しました。そして 2021 年末には全国 7 つの美術館・博物館での開催が決まったのです。年が明けた 2022 年以降、展覧会の構成作りと出品リストの作成が本格化しました。開催館と事務局（東映、朝日新聞社）からの要望を取り入れながら、わかりやすく「民藝」を見せるのが、企画を構築する私の最大の問題でした。

企画構築のヒントとなったのは、2019 年に日本民藝館で開催された企画展「食の器」でした。同展は柳宗悦が 1941 年に日本民藝館内で行った「生活展」をテーマにした展覧会です。「生活展」を知らなかった私は、家具や食器が一体となった「民藝のある暮らし」に新鮮な感覚を覚えました。そこで、展覧会場の最初に「生活展」の再現を展開し、その後暮らしに関係する民藝品を「衣・食・住」で分類して紹介する、「民藝と暮らし」をテーマにした展覧会構成を発案したのです。

また、開催館と事務局からは、現代に続く民藝の産地と職人を紹介して欲しいという要望がありました。「生活展」と「衣・食・住」の作品を、現在の産地・職人と違和感なくどう結び付けるのかが課題となりました。熟慮を重ねた結果、柳の没後に刊行された『世界の民芸』（濱田庄司、芹沢銈介、外村吉之介共著）掲載の品を展覧して、柳没後の民藝の広がりを考察し、現代へ続く民藝として産地と職人を紹介するコーナーを構築しました。民藝の産地は、柳や民藝運動と関連のある産地を 5 か所選定し、かつて作られた名品と昭和戦後期以降の作品、そして現在作られる製品とそこで働く職人たちの今を紹介。産地と職人のインタビューは開催館の学芸員が主体となって行うことになりました。

展覧会構成と出品リストが確定したのは 2022 年秋。その後は展覧会図録の制作に追われ、第一会場の大阪中之島美術館では 5 日間の展示作業に立ち会いました。大阪中之島美術館以降、展覧会は全国 6 会場で開催が予定されており、来年 2024 年春には世田谷美術館で開催されますので、ご覧いただければ幸いです。

大阪中之島美術館
「民藝　―美は暮らしのなかにある」2023年

「民藝展」の開催後、「展覧会屋」の私が次に手掛けるのは本学にリニューアルオープンする「霞会館記念学習院ミュージアム」の開幕展です。現在、展覧会構成と出品リストの最終プラン作成に向け、作業の真っただ中にあります。どうぞご期待ください。

日本民藝館での「生活展」の様子 1941年

美術館の現場から
―新しい「蔵」とともに

藤田美術館 学芸員
本多（ほんだ） 康子（やすこ） （平成19年度 学芸員資格取得、平成26年度 学習院大学大学院人文科学研究科博士後期課程単位取得退学）

藤田美術館に学芸員として勤務してから、ようやく2年半が経とうとしています。

私が現職に就いたのは、2021年4月、コロナ禍が未だ収束せず目まぐるしく社会情勢が変化する最中でのことでした。2022年４月にリニューアルオープンを控えた、ちょうど１年前になります。

本学では、文学部日本語日本文学科から人文科学研究科美術史学専攻に進学し、日本中世絵画を中心に学びました。学部生の頃まではあまり美術や美術館には馴染みがなかったのですが、絵巻をテーマに卒業論文を執筆したことをきっかけに日本美術にのめり込み、もっと知りたい、専門的に学びたいとの思いから、美術史学の道を志しました。博士後期課程の満期退学後、美術史学とは異なる業種での勤務を経て、遅まきながら学芸員としてのスタートを切りました。

藤田美術館について

藤田美術館は、近代の関西実業界において活躍した藤田傳三郎（1841～1912）とその息子たち・平太郎、徳次郎らが蒐集した、東洋古美術コレクションを有しています。「曜変天目茶碗」「玄奘三蔵絵」などの国宝9件、「交趾大亀香合」「快慶作木造地蔵菩薩立像」などの重要文化財53件を含む、約2,000件の所蔵作品があります。明治維新後、廃仏毀釈や西洋文化の導入による急激な社会変化のなかで、日本の古美術が流出・廃棄されていた危機的状況を憂いた傳三郎は、それらの散逸を防ぐために、仏教美術をはじめとする古美術の蒐集を精力的に行いました。また事業のかたわら、近代数寄者として能楽、茶道、謡曲などの日本文化への造詣を深め、茶道具や能装束などを熱心に蒐集するなど、現在のコレクションの礎を築き上げました。

昭和29年（1954）には、蒐集した美術品を保存・公開するため、網島の藤田家本邸に併設していた蔵を改装して展示室をつくり、「蔵の美術館」として新たなスタートを切りました。開館以来は春季・秋季の年2回展示をしていましたが、施設の老朽化により建物を全面改築することとなり、2017年から約5年間の休館を経て、2022年4月に新たな建物にてリニューアルオープンしました。

建て替えに伴い、施設面や運営面において、いくつかの試みを導入しています。

まず施設面については、旧建物とは全く異なる外観ながらも「蔵の美術館」としてのコンセプトを継承すること。白い大きな庇と全面ガラス張りの壁面が特徴的な現代建築ですが、随所に旧館の石畳、梁、床板などの部材を再利用しています。また、展示室の外壁は左官職人が手ずから白い漆喰で塗り固める伝統的な蔵の手法を用いるなど、新しくもどこか懐かしい雰囲気を伝えます。明治期以降、戦災に耐えながら約100年近く美術品を守り抜いてきた蔵を継承し、この建物が新たに作品を守る次世代の「蔵」となるように、との願いが込められています。

他方、運営面においては、新しい試みに挑戦しています。

一つは、年末年始以外の休館日を設けないこと。展示室内を可動壁にて4つに区切り、そのうち3つの部屋では各1テーマの展示を3ヶ月間行い、残りの1部屋は閉室して、メンテナンスや次回展示準備にあてます。このように1ヶ月ごとに壁をずらして順繰りに公開していくことで、開館中に同時並行して次回展示準備をしながら、休館日を設けずに公開ができるようになりました。

もう一つは、展示室内の作品解説をすべてQRコード読み取り式にし、館内の来館者が手持ちのスマートフォンで読めるようにしたことです。掲出しているキャプションは、作品名・時代・作者などの最小限の情報にとどめ、一つ一つの作品と向き合って、集中して鑑賞してもらうことを目指しています。

学芸員の仕事・心に残ったこと

学芸員としてまだ経験は浅いですが、携わったなかで特に印象に残っている仕事は、改築期間中に他館に預けていた全所蔵作品を新たな「蔵」（収蔵庫）に納める作業です。竣工したばかりの新しい建物は、空気環境が安定していないため、すぐに作品を収蔵することはできません。そのため約1年間建物を「休ませる」期間を経て、リニューアルオープン直前にようやく搬入することができました。

藤田美術館
白い庇とガラス張りの壁面による外観

藤田美術館
展示室内は可動壁（間仕切り）によって、様々なレイアウトに模様替えできます

この大規模な引っ越し作業は想像以上に大変で、まさに時間との戦いでした。少しずつ作品を搬出し、1つ1つ開梱・検品・記録をしてから、収蔵庫に納めるといった作業をひたすら約半年間かけて行いました。どの作品をどこに収蔵するかはある程度決まっていたものの、実際運び入れてみると、指定場所に納まらずに別の場所へ…、ということもしばしばありました。住所未定の作品は、全体の占有面積・占有率を考慮しながら、新たに収蔵場所を決めなければなりません。また、大型の作品に関しては運搬だけでも一苦労です。仏堂を支えていた木造の円柱や須弥壇といった超重量級の作品などは、数人がかりでへとへとになりながらようやく搬入しました。床を埋め尽くす未開梱の作品群を見ながら、これらは本当にちゃんと収蔵庫に納まるのだろうか、リニューアルオープンに間に合うのだろうか…と不安に駆られながら、思わずため息をついたこともあります。そのような苦労の中にあっても、やはり所蔵作品を一度に全部見て確認できたことは、美術館の建て替えという歴史的な転機に立会ったからこその大変貴重な体験でした。そして、改めてコレクション全体を俯瞰しながら、これから学芸員としてその多種多様な作品たちを守っていく立場になるのだ、という決意を新たにしました。

リニューアルオープンから1年半、約16のコレクション展を行いました。当館は基本的に所蔵作品のみで展示を構成します。それぞれ漢字一文字のテーマを設け、それに因んだ作品を選びジャンルを限定せずに展示しています。そのような展覧会に係る学芸の仕事を通して実感したことがあります。

まず一つは、自分の専門分野に限らず、あらゆるジャンルの作品について幅広く深い知識が求められることです。大学院では、絵巻を中心とした中近世の日本絵画を中心に学んでいたため、絵画以外の作品を取り扱ったことがありませんでした。しかし、藤田美術館では約2,000件ある所蔵作品の中で、陶磁器、彫刻、漆器、金工、染織、絵画、書跡など多岐にわたるジャンルを扱わなければなりません。なかでもとりわけ多い茶道具や能装束といった芸能に係る作品については、茶の湯や能楽などの知識も必要になります。自分の知識不足を補いながら、一つ一つの作品に真摯に誠実に向き合い、その特徴や状態を頭に叩き込む――そのような地道な作業を積み重ね、実践しながら日々学んでいます。

もう一つ大事なことは、チームワークです。毎月末の展示替えは学芸員のみで行い、さらに休館日がないため、閉館後から次の日の開館時間までにすべての展示作業を完了しなければなりません。展示ケースや可動壁の移動、作品の撤収と展示、バナーやパネルの設置、照明調節の諸作業を手際よくスムーズに行うには、お互いをフォローしあうチームワーク力が鍵となります。予定通りに展示作業を終え、翌日の開館時間に無事に来館者を迎え入れる瞬間が、なによりもほっと安堵する瞬間です。

さらに、個人コレクションに基づいた私立美術館ならではの役割として、創立者（設立者）の史資料を整理し、その調査・研究を行うことがあげられます。現在、藤田傳三郎をはじめとする藤田家関係の資料（手紙、古写真など）を整理しており、そこから当時の美術を結節とした人的交流やそれらを取り巻く歴史的・社会的背景が少しずつ明らかになりつつあります。例えば、大倉喜八郎から傳三郎に宛てた明治39年の手紙では、明治期の廃仏毀釈によって苦境にあった興福寺が、「破損仏」を各コレクターに譲渡した経緯がわかりました。このような資料を通して、歴史のはざまを垣間見るような事実をすくいあげるのも醍醐味の一つと言えるでしょう。

学芸員を目指す学生の皆さんへ

ようやくコロナ禍も終息の兆しがみえ、美術館・博物館活動や展覧会事業も通常に戻りつつあります。学芸員を目指す皆さん、美術や美術史を学ぶ皆さんにとって、やはり美術作品を直接じっくりと観察する体験を通して、何か気づきや知見を得る機会はなによりも収穫になると思います。ぜひ、色々な場所に足を運んで、丁寧に作品と向き合ってみてください。

P8　画像提供:茨城県立歴史館

館園実習を迎える皆さんへ

茨城県立歴史館

令和4年度
文学部史学科4年
細川 諒一朗（ほそかわ りょういちろう）

茨城県立歴史館　外観

民俗資料のクリーニング

はじめに

私は地元である茨城県の茨城県立歴史館にて館園実習を行いました。茨城県立歴史館は全国的には珍しい博物館と文書館の2つの機能を併せ持つ施設として知られており、登録博物館に含まれるほか、茨城県内には3件しかない公開承認施設でもあります。

館の概要

東京ドームの約1.5倍という敷地は本館の他、文書館施設である書庫や閲覧室、野外施設である旧水海道小学校本館、旧茂木家住宅、旧水戸農業高等学校本館などで構成されており、特徴的な銀杏並木と共に地域に根差した施設となっています。

実習内容

館園実習は7月26日から31日までの6日間行われました。初日には歴史館の概要、教育普及活動の現状について学びました。2日目は歴史系展示の在り方について館内を回りながら解説をいただいた後、行政資料の取り扱いについて実際に作業されている作業室にお邪魔させていただき、主に資料がどのように整理・保存されているのかについて学びました。また、教育資料にフォーカスし各々が興味を抱いた資料の紹介文を作成、投稿するといったSNS 業務の体験も行いました。3日目は主に歴史資料について、実際の保存作業の一部である保存袋の入れ替え業務を通してその取り扱いについて学びました。4日目は民俗資料について、クリーニング、撮影、採寸を通しての調書作成という一連の資料保存作業を体験する中でその取り扱いについて学びました。また展示の企画を行い、タイトルや目玉資料、売り込み戦略に至るまでその予算やスケジュールなども想定する形で立案し、発表しました。5日目は美術工芸資料について掛軸の目録作成を通してその取り扱いについて学んだほか、展示実習も行いました。展示実習では掛軸、巻子、和綴じ本などの展示を行いました。最終日は考古資料について目録作成を通して学びました。また刀剣の見方、取り扱い方を実際の刀剣を使用して教わりました。

私は館園実習の意義は大学の講義だけでは知ること、気が付けないことを発見できることにあると考えます。多くの履修生が館園実習を歴史資料や考古資料の取り扱いなど、実際の資料に触れる機会として捉えるかと思います。私も今回の実習で刀剣や土器などを扱い、調書の作成などを通して資料に触れる機会を多く与えていただきました。普段ケースの外からしか眺めることができない資料に実際に触れ丁寧に見ていくことは、学芸員という仕事の本質であり、歴史を研究する学生という立場からも学芸員という仕事の魅力の一つとして再認識することができました。しかし、私はこの“資料に触れる”ということを断片的な経験として消化してしまうことはもったいないと思っています。学芸員課程の履修科目でも、歴史が専門であれば普段の講義でも、何かが繋がり知識としての広がりを持たせてくれるきっかけになります。

特に印象に残ったものとして4日目の民俗資料の取り扱いについてあげたいと思います。私は大学の講義で民間所在史料の現状について学んでいました。講義では文書をはじめとする歴史資料にフォーカスした内容となっていましたが、博物館の現場で問題となっているのは当然文書だけではありません。民俗資料は人々の生活に馴染んできた生活の道具が中心となります。実習では民俗資料に対して、梱包の開封から刷毛を使用してのクリーニング、デジカメによる撮影、縦・横・高さの採寸を行ったほか、資料名・法量・状態・番号や分類などのPC上での台帳記入を通しての調書作成を行いました。実際にだるまをはじめとする民俗資料を手にしても素人目には価値を十分に理解することが難しいと感じるものも多くありました。“民間所在史料が失われている“という問題の原因は「どう保存したらいいのかわからない」「今まで取っておいたけど場所をとるから捨ててしまおう」というように民間の方々が資料としての価値をある程度認識した上でのものとばかり思っていましたが、実際にはその価値を認識されることなく失われている資料が多くあるだろうことを学びました。資料に触れて感じることは人それぞれですが、少しの意識を持って臨むだけでも人より多くのものを持ち帰ることができると思います。

おわりに

ぜひ館園実習という貴重な経験を経験としてだけで消化するのではなく、本当の意味での貴重な経験にあなた自身でしてほしいと思います。

P9　画像提供:東京都現代美術館

“真のプロフェッショナル”を目の当たりにした博物館実習

東京都現代美術館

令和4年度
文学部哲学科4年
吉野 苑花（よしの そのか）

東京都現代美術館　外観

エントランスホール　（左右とも）Photo:Kenta Hasegawa

はじめに

私は、2022年10月4日～8日の5日間、東京都現代美術館の実習に参加させていただきました。一来館者として何度も訪れたことのある美術館でしたが、実習を通して、今まで気にも留めなかった細部の至る所に館側の工夫が込められていることを知りました。本稿では、その中でも特に感銘を受けたことを紹介したいと思います。これから実習に行かれる皆さんの学びの一助となれば幸いです。

館の概要

東京都現代美術館は、日本の戦後美術を中心に国内外の現代美術を体系的に研究、収集、保存、展示するための美術館として1995年3月に開館しました。1926年に上野公園内に開館した東京都美術館（当初は東京府美術館）において形成された、約3,000点の作品と58,000部の図書資料を引き継ぎ、これらをコレクションの核としたのが始まりです。現在では、5,700点を超える作品と27万冊を超える図書資料を有しています。

実習内容

【1日目】館内見学、企画展について（講義）
【2日目】コレクション展について（講義）、MOTコレクション展見学、作品調査概要実習
【3日目】東京都現代美術館について、教育普及について、広報について（以上、講義）
【4日目】レファレンス実習、課題ディスカッション
【5日目】教育普及プログラム実習、学芸員の日常（講義）、振り返り

実習初日から4日目にかけて、空き時間などを使って、企画展示を毎日見に行くという課題が出されていました。展覧会の趣旨や構成、細かな工夫を書き込むワークシートを片手にじっくりと展覧会を観察しました。ワークシートを渡された時は、用紙を埋めることが出来るか心配だったのですが、1日目、2日目、と講義を重ねることで段々と見る目が養われ、たくさんのことに気づくことが出来たと思います。このワークシートをもとに、4日目のディスカッションでは、実習生同士それぞれの気づきを共有し合いました。

すべてのことに気づけたように思っていた私たちでしたが、担当学芸員の方のお話を聞いて、想像以上に細かい部分に学芸員の意図が働いていることが分かりました。特に驚いたのは、休憩スペースに与えられた意図です。実習時に開催されていた展覧会では、展示を一周見終えた所に、椅子が並んだ、窓のあるスペースがありました。何の変哲も無い休憩スペースだと思っていたのですが、実は外の景色を見る体験まで含めて作品なのだそうです。担当学芸員の方が、あえて作家に「外が見えるスペースも自由に使ってください」と提案したと聞きました。作家の意図さえも、学芸員によって引き出されたものだったのです。学芸員が「作家の良き理解者」であり、信頼を得ているからこそ生まれた展覧会だったように感じました。

しかし、学芸員は「お客様の良き理解者」でもありました。お客様の多くは、展示の冒頭は解説パネルなどの文字を丁寧に読み、終盤になるにつれて文字は読み飛ばすようになっていくようです。この傾向を利用して、長い解説は冒頭に集め、最後の方は解説の文字数を抑え、大規模な作品をメインに配置したそうです。その他、様々なところに工夫が凝らされていることを知らされ、これぞプロフェッショナルの成せる業だと思わされました。これから実習に行かれる皆さんにも是非、この驚きを感じてもらいたいです。

おわりに

本稿では、展覧会の企画について学んだことを中心に述べましたが、コレクション・教育普及・広報・美術図書室…と、どの担当の方たちも皆が熱い理念を持ち、一生懸命働かれていることが強く伝わってくる実習でした。これまで学芸員課程の授業を通して、学芸員は専門性は勿論のこと、人と人との繋がりを大事にすることや広い視野を持つことなど豊かな人間的資質が必要であることを学んできました。東京都現代美術館での実習では、それを目の当たりにすることが出来たと思います。

実習の最後に、5日間を通して実習生に付き添ってくださった教育普及係の方が、ご自身の前職での営業経験が今に活きていると仰っていたことが印象的でした。一見学芸員の仕事とは関係ないことも意外な形で役立つのかもしれません。そのため、私も人生のあらゆる経験を貴重に捉え、すべてを糧にし、“真のプロフェッショナル”になりたいと思いました。

キュレーターズコースへようこそ

学習院大学で学芸員資格をとるには

学芸員課程について

将来、博物館で働くことをめざす学生は、学士の称号を得て、必要な授業の単位を修得することで、博物館の専門職である“学芸員”の資格を取得することができます。学習院大学で、その運営を担当するのは学芸員課程委員会、窓口を担当するのは学内の博物館相当施設である史料館内に設置された学芸員課程事務室です。

昭和56年に学習院大学で学芸員資格取得がスタートしてから40年近くを経て、資格をとった学生の数は、3600人を越えました。もちろんそのなかには、博物館の現場へ旅立っていった卒業生たちが数多くいます。

各館で活躍中の学芸員を中心とする顔ぶれ豊かな講師陣による授業。現場の大学博物館として年間数十名にのぼる実習生を受け入れ、さらに日々現役の学芸員たちが学生からの相談に応じる史料館のサポート。平成24年度から名称やカリキュラムも新たになった学芸員課程は、このような学内協力体制と、なによりより実習を受け入れてくださる全国の博物館・美術館との関係を大切に継承しつつ、今後もさらに充実した授業運営をめざします。

学芸員資格を取得するためには

① 学士の称号を得ること
②「博物館に関する科目」の必要な単位をとること

必修科目19単位すべて
選択科目８単位以上（文化史、美術史など9つの系列のうち、最低2系列にわたり8単位以上、各系列4単位以上）**が必要です。**
※詳しくは、最新のシラバスや手引を確認してください

最短で2年でとることができますが、卒業に必要な単位とは別なので、4年間かけて計画的に単位をとることをおすすめします。必要な単位をとると、学部卒業と同時に資格が取得できます。（大学院生・科目等履修生の方は、単位が揃った時点で資格が取得できます）

また、科目をとり始める年には、必ず4月上旬に開催される「博物館に関する科目履修ガイダンス」に出席して、所定の手続きをしないと履修が開始できません。ガイダンスや単位修得にかかわる事務室からのお知らせは、**G-port上や学芸員課程事務室のHP、北1号館西側掲示場の掲示板**に掲示されます。

見逃さないように！

「博物館実習」のクラス分けは委員会におまかせ

2年生で履修登録をし、その後3年生終了時までに、最低でも**「博物館概論」・「博物館資料論」・「博物館資料保存論」・「博物館展示論」・「博物館教育論」**の5科目の単位を修得し、指定のガイダンスへの出席と所定の手続きを済ませると、次年度4年生で「博物館実習」を履修することが出来ます。

この科目は「学内実習」（通年週1回の授業）と、「館園実習」がセットになった科目です。

通年週1回の「学内実習」のクラスは現在、美術系、歴史系の2つに分かれ、15名以下の小人数クラス制となります。ちなみに、**令和５年度**は**７クラス**開設されました。

「館園実習」は、学習院大学史料館または学外の博物館・美術館・文学館などの現場で、1～2週間程度行われます。

この「博物館実習」を履修し資格を取得するには、以下の［学芸員資格取得までの手続きの流れ］に沿って必要な手続きを踏みましょう。

学芸員資格取得までの手続きの流れ

履修に関する重要なお知らせは、北1号館西側掲示場の学芸員課程エリアに掲示されます。

2年次
① 4月上旬　博物館に関する科目履修ガイダンス
②「博物館に関する科目履修申込書」提出
　博物館に関する科目履修費（¥10,000）納入
　※科目履修登録は2年生以上しかできません。
③ G-Portで今年度履修する各科目を登録

3年次
① G-Portで今年度履修する各科目を登録
　※「博物館概論」「博物館資料論」「博物館資料保存論」「博物館展示論」「博物館教育論」取得
　（3年次終了までにこの5科目の単位を取得していないと4年生で実習は履修できません。）
② 11月上旬　第1回博物館実習履修ガイダンス
③ 12月初旬　博物館実習仮登録
　「博物館実習履修申込書（仮登録）」「特別ガイダンスレポート」提出

4年次
① 4月1日頃　博物館実習履修有資格者の発表（掲示）
　「博物館実習」通年授業クラス分け発表
② 4月上旬　第2回博物館実習履修ガイダンス
③ 博物館実習履修申込「博物館実習履修申込書」提出
　博物館実習履修費（¥5,000）納入
④ 4～6月　館園実習先が順次決定
⑤ 5月頃　館園実習事前ガイダンス
⑥ 5月～12月頃　学内外の各館園での館園実習
⑦ 3月10日頃　博物館学芸員資格取得者発表（掲示）
⑧ 3月20日　卒業式「博物館学芸員資格取得証明書」交付

皆さんはこの広報誌や、先輩の話などを参考にして、学習院大学史料館で実習したいのか、それとも学外の館園で実習したいのか、その場合どのような館園で実習したいのか、などをよく考えておく必要があります。ただし、基本的には前年度博物館実習を受け入れてくださった館園以外で実習できる可能性は少ないですし、たとえば美術館では美術史専攻以外の学生はほとんど実習できないという現状もあります。また、実習を受け入れてくださる館園には限りがありますので、すべての方の希望を叶えることは困難で、希望通りにならない場合が多々あります。その点はどうかご理解ください。

なお、帰省先などで縁故等があり、館園実習先を自分で探して依頼しようとする人は、心当たりの館と交渉をし始める前に、必ず学芸員課程事務室に相談に来てください。理想と現実を踏まえて、「仮登録」をし、レポートを提出してください。そのレポートに基づき、委員の先生方が皆さんの実習クラス、実習館園を決定いたします。

博物館に関する科目および履修年次（参考：令和3年度）

	博物館法施行規則による科目		本学の対応授業科目	単位	履修年次
必修科目（19単位）	生涯学習概論	☆	生涯学習概論	2	1～4
	博物館概論	☆	博物館概論	2	2～3
	博物館経営論	☆	博物館経営論	2	2～4
	博物館資料論	☆	博物館資料論	2	2～3
	博物館資料保存論	☆	博物館資料保存論	2	2～3
	博物館展示論	☆	博物館展示論	2	2～3
	博物館情報・メディア論	☆	博物館情報・メディア論	2	2～4
	博物館教育論	☆	博物館教育論	2	2～3
	博物館実習	☆	博物館実習	3	4
選択科目（最低2系列以上にわたり8単位以上・各系列4単位以上）	文化史	☆	文化史特殊講義	4	2～4
		☆	資・史料整理法	4	2～4
	美術史		美術史講義	4	2～4
	考古学	☆	考古学	4	2～4
	民俗学	☆	民俗学特殊講義	4	2～4
	自然科学史	☆	自然科学史	4	2～4
	物理		力学基礎1	2	1
			電磁気学1	2	1
	化学		無機化学Ⅰ	2	1
			無機化学Ⅱ	2	1
			有機化学概論Ⅰ	2	1
			有機化学概論Ⅱ	2	1
	生物学		生化学1	2	1
			生化学2	2	1
			動物科学	2	1
			植物科学	2	1
	地学		地学概論Ⅰ	2	2～4
			地学概論Ⅱ	2	2～4

☆は「博物館に関する科目」特設科目

令和５年度　博物館実習依頼館園

出光美術館、上野の森美術館、大原美術館、学習院大学史料館、神奈川県立近代美術館、鎌倉国宝館、鎌倉市鏑木清方記念美術館、川越市立博物館、九州国立博物館、江東区芭蕉記念館、郡山市立美術館、国立映画アーカイブ、国立科学博物館、五島美術館、さいたま市立博物館、進化生物学研究所、新宿区立新宿歴史博物館、世田谷美術館、世田谷文学館、たばこと塩の博物館、千葉市美術館、ちひろ美術館・東京、東京国立博物館、東京都江戸東京博物館、東京都葛西臨海水族園、東京都現代美術館、日本近代文学館、平塚市美術館、福島県立美術館、府中市美術館、古川美術館、前田育徳會尊経閣文庫、町田市立国際版画美術館、目黒寄生虫館

卒業生の主な就職先

【国立】宮内庁三の丸尚蔵館　宮内庁書陵部　九州国立博物館　京都国立博物館　国文学研究資料館　国立新美術館　国立西洋美術館　国立歴史民俗博物館　東京国立近代美術館　東京国立博物館　東京大学史料編纂所　東京文化財研究所　文化庁　など
【公立】愛知県芸術文化センター　愛知県陶磁資料館　愛知県総務部文化振興局振興課　秋田県立博物館　安野光雅美術館　板橋区立美術館　茨城県立近代美術館　井原市立田中美術館　入間市博物館　いわき市勿来関文学歴史館　江戸川区教育委員会　江戸川区郷土資料室　O美術館　大磯町郷土資料館　大分県立歴史博物館　大阪府立弥生文化博物館　大阪市東洋陶磁美術館　大阪市立美術館　神奈川県立神奈川近代文学館　神奈川県立近代美術館　神奈川県立歴史博物館　金沢21世紀美術館　鹿沼市立川上澄生美術館　鎌倉文学館　川越市立美術館　川崎市市民ミュージアム　キッズプラザ大阪　熊谷市役所埋蔵文化財担当　群馬県立歴史博物館　江東区芭蕉記念館　神戸ゆかりの美術館　埼玉県立近代美術館　埼玉県立文書館　佐賀県名護屋城博物館　寒川町立文書館　静岡県立美術館　品川区立品川歴史館　島根県立美術館　白根記念渋谷区郷土博物館・文学館　新宿区教育委員会　杉並区立郷土博物館　世田谷美術館　高井鴻山記念館　高浜市やきものの里かわら美術館　多摩六都科学館　千葉県文書館　千葉市美術館　秩父市役所教育委員会　千代田区立日比谷図書文化館　土浦市立博物館　東京都江戸東京博物館　東京都公文書館　東京都現代美術館　東京都写真美術館　東京都美術館　東京都埋蔵文化財センター　戸田市立郷土博物館　栃木県立博物館　富山県水墨美術館　豊田市美術館　中野区立歴史民俗資料館　長野県信濃美術館・東山魁夷館　中山道広重美術館　新潟県立近代美術館　新潟県立万代島美術館　練馬区立美術館　芳賀町生涯学習課　馬頭町広重美術館　東村山市教育委員会　彦根城博物館　平塚市美術館　広島市現代美術館　深谷市教育委員会　福島県伊達市教育部　福井県立博物館　福井県立美術館　藤沢市文書館　府中市郷土の森博物館　三鷹市美術ギャラリー　村上水軍博物館　山口県立美術館　山口県立萩美術館　大和市教育委員会　山梨県立美術館　山梨県立文学館　横須賀美術館　横浜美術館　横浜市歴史博物館　和歌山市立博物館　など
【私立】出光美術館　上野の森美術館　永青文庫　MOA美術館　岡田美術館　太田記念美術館　お札と切手の博物館　学習院大学史料館　霞会館　鎌倉考古学研究所　鎌倉市芸術文化振興財団　軽井沢アートミュージアム　軽井沢千住博美術館　河鍋暁斎記念美術館　切手の博物館　ギャルリータイセイ　茶道美術館　サントリー美術館　サンリツ服部美術館　渋沢史料館　しょうけい館　城西国際大学水田美術館　承天閣美術館　女子美術大学美術資料館　昇仙峡ロープウエイ七宝美術館　水府明徳会彰考館徳川博物館　静嘉堂文庫美術館　泉屋博古館分館　浅草寺宝物館　センチュリーミュージアム　そごう美術館　東郷青児記念損保ジャパン日本興亜美術館　竹久夢二美術館　竹久夢二伊香保記念館　逓信総合博物館　東京藝術大学大学美術館　徳川記念財団　徳川美術館　徳川黎明会　土佐山内家宝物館　難波田龍起・史男記念美術館　ニューオータニ美術館　日本銀行金融研究所貨幣博物館　名古屋ボストン美術館　箱根ガラスの森美術館　畠山記念館　原美術館　ハラミュージアムアーク　平木浮冊絵美術館　物流博物館　筆の里工房　プリヂストン美術館　細見美術館　ポーラ文化研究所　前田育徳會尊経閣文庫　松岡美術館　三井記念美術館　三菱史料館　目黒雅叙園美術館　森美術館　弥生美術館　陽山美術館　流通経済大学三宅雪嶺記念資料館　ルネ・ラリック美術館　など
【海外】上海博物館

新ミュージアムへの移転のお知らせ

学習院大学史料館は令和 6 年（2024）度に「霞会館記念学習院ミュージアム」として生まれ変わります。学芸員課程も、このミュージアム内へ移転のため、下記の通り閉室を予定しています。

閉室期間：令和５年８月１日～
　　令和７年３月頃まで

閉室中も史料館事務室・学芸員課程事務室ともに職員は出勤しておりますが、電話がつながりにくい場合があります。

その間の学芸員課程に関するお問い合わせ（履修相談・実習関連等）は、学芸員課程事務室へ電話またはメール cur-off@gakushuin.ac.jp でご連絡ください。

【霞会館記念学習院ミュージアム　完成予想図】